

コスモポリタニズムとその敵

——政治と形而上学——

河野哲也

著者は、今後の世界の倫理的かつ政治的方針の基本としてコスモポリタニズムを提案したい。前著 (河野, 2014) では、世界政府ないし国際機関が、各国政府の運営する学校とは独立に、コスモポリタン教育を実施する学校や教育機関を運営することを提案した。本稿では、前著の教育の問題よりももっと基本的な問題へと遡り、そもそもコスモポリタニズムが、基本的な倫理的かつ政治的原則としてどうして真剣に希求され、実現が求められるのか、その動機について論じる。またそれとともに、コスモポリタニズムの実現を根本のところで拒否する挑戦についても分析し、その対立が形而上学的あるいは存在論的と呼んでよい深いレベルのものであることを指摘したい。

1. コスモポリタニズムとは何か

まず、コスモポリタニズムを定義しておく。コスモポリタニズムとは、すべての人間は、その民族的・国家的な帰属にかかわらず、何よりもまず、人類というひとつの共同体に属する市民であるという考え方である。より簡略に言えば、コスモポリタニズムとは、ある人を何よりも人間として扱う態度のことである。人間は、特定の共同体の中に生まれ落ちる。特定の共同体の成員として成長し、その一員となる。コスモポリタニズムは、ある人を特定の共同体の成員であることを認めながらも、それ以前に、その人が人類というひとつの共同体に属する市民であることを主張する。コスモポリタニズムは、人種、民族、宗教、性、地域性といった人間を小集団へと分類する特殊な側面に注目する前に、何よりも人間としての共通性に目を向ける。人間の共通性とは、人間が同じものを共有していることをいう。

しかしここで「人間が同じものを共有している」という場合、人間に帰属できる何かの内在的な性質、たとえば、理性とか、言語能力とか、ある遺伝子配列とか、直立などの動物学的特性といった性質があらゆる人類に共通に内在していると想定しているわけではない。人間が共有しているのは、その逆に、人間個々人の外にあるものである。すなわち、地球環境、世界の経済、政治、文化である。地球における自然環境、経済、政治、文化はすべて、ひとつにつながりあっており、すべてが連続している。人間はその環境を共有している。この事実は、グローバル化する現代社会ではなおさら当てはまる。交通や輸送、

通信技術などの発達によって人・モノ・カネ・情報が行き交い、政治・経済・法・文化の相互影響が、国家や地域などの境界を越えて地球規模に拡大し、ひとつに繋がっている。地球の反対側の小さな出来事が、かつては考えられなかったほど大きな影響を私たちに及ぼす。

すなわち、人類は地球を共有している。どの人間も、その同じ地球上の同じ人類であるという自覚がコスモポリタニズムに他ならない。コスモポリタニズムは、人類に対する忠誠だというのは正しいが、それは、誰であれ人間は地球を共有している同等の存在であり、それゆえに、個々人の人間には同等の道徳的な関心が払われるべきだという主張を核としている。私たちは、世界や地球を意識することによって、むしろ人間個人に焦点を当てることになる。現代の代表的なコスモポリタニズムの提唱者であるトマス・ポッグ (ポッグ, 2010) はいかなるコスモポリタニズムも、個人主義、普遍性、公平性の要素を含むと指摘する。それが、(普遍的に) どの個人であれ、人間として対等に扱うという意味であるなら、まさしくポッグ (2010) の指摘は的を射ている。

よって、コスモポリタニズムとは、ある人間個人を、人種、民族、国家、地域といった小集団への帰属に先んじて、人類という最大の共同体の一員として扱う態度をいう。ある個人を人類という共同体の一員として扱うということは、その個人を他のどの個人とも同等の存在として道徳的配慮の対象とするということである。これは、個人中心の倫理観に他ならない。この人間個々人の人権に応じる法をコスモポリタン法 (世界市民法) と呼ぶ。それは、人間である限りあらゆる人格に当然与えられる根源的な権利に応ずる法のことである。コスモポリタンな政治権力は、コスモポリタンな法権利の要請に応え、それを擁護・伸張するための制度である。コスモポリタニズムには、コスモポリタンな政治権力としてある種の世界統一政府を志向する場合もあるが、国家や地域的な国家連合よりもさらに包括的な国際関係を志向するだけの場合もある。本論では、コスモポリタニズムを実現するために、どの程度の権力と権限をもった世界政府が必要とされるのか、あるいは、各国家から比較的独立の国際機関で十分なのかといった点については、紙幅の都合上、議論できない。

2. コスモポリタニズムの動機

それでは、なぜ、コスモポリタニズムが求められるのだろうか。その動機は、端的に言えば、ローカルな共同体の能力的な限界の認識、およびローカルな共同体への不信から生まれてきているといえるだろう。

前者について考えてみよう。先のグローバル化が進行する現代の世界では、貧困や寛容

問題、政治的な対立は、個々のローカルな共同体、すなわち、国家や地域共同体では問題解決できないほどに広範囲に渡っていたり、拡散していたり、深刻化していたり、複雑化していたりする。それらの問題は、より大きな政治的・経済的な力によって解決される必要がある。コスモポリタニズムが求められるのは、それが国家や地域共同体よりも大きな問題解決の能力を持っていると考えられるからである。しかしながら、ローカルな共同体の人々、とくにその為政者たちが、自分たちの共同体の能力の限界を認め、世界のさまざまな国家や国家連合に助けを求めたならば、とくにコスモポリタニズムといった原理に訴えかけずとも問題解決はできるように思われる。実際に今日、伝統的に国民国家と結びつけられてきた主権概念は相対化され、ヨーロッパ連合のように、かつて国家が一手に引き受けてきた政治的な機能は、それより下位の地域や都市とヨーロッパというより広域の諸主権へと分散されている。そうした広域の国家連合によって、ここの国家の問題の解決が図られる場合がある。たとえば、近年のギリシャの経済危機に対して、ヨーロッパ連合が応じるような場合がそうである。ヨーロッパ連合は、国民国家とコスモポリタニズムの中間に位置するのかもしれないが、いずれにせよ、コスモポリタンな政府ほど大きな権限をもっていない。

コスモポリタニズムが主張されるのは、むしろ後者の場合、すなわち、ローカルな共同体への深い不信の念からである。コスモポリタニズムは、キニク派の哲学者であるシノペのディオゲネス (Diogenes ho Sinopeus, c.404-323 B.C.) によってはじめて唱えられたと伝えられる (ディオゲネス・ラエルティオス, 1984-1994; 山川, 2008)。アレキサンダー大王の尊敬を受けた逸話で有名だが、ディオゲネスは社会的な帰属を持ち得ない人物であった。本人ないしは父親の通貨偽造の罪でポリスを追放され、奴隷として売られたこともあった。祖国を奪われ、帰属できる国もなく、古代ギリシャの民主制の成員となれなかった。彼は、アテナイの民主主義が奴隷制の上に成り立っている欺瞞を批判し、すべての人が平等となる真の民主主義を訴えた。唯一の正しい政府は世界政府であると主張し、自らをコスモポリタンと称した。ディオゲネスは、当時の民主主義を標榜するポリスへの深い不信感を持っていたと言えよう。

近代的なコスモポリタニズムの唱導者は、もちろんカントである。カントは『永遠平和のために』(1985) のなかでコスモポリタニズムを唱えたが、それは国家が戦争の主体であったからである。戦争を避けるために国際連合と世界共和国を提案したことは知られている。カントは人類による「地球表面の共有」という重要な考えを打ち出し、人間は移動し、交易や商業などの交流し合う権利を有していることから、外国人が別の国に足を踏み入れたときにも敵視されず、歓待される権利を持つことを主張した。ただし、それはその

国を訪問し、しばらく滞在する権利であり、居住する権利ではない。

コスモポリタニズムが提案されるのは、ディオゲネスにおいても、カントにおいても、国家や地域政府などのローカルな共同体が個人に対して不正を働くからである。コスモポリタンな政治学の立場に立つリンクレイターによれば、「人間は、個別の共同体に所属しているせいで互いに疎遠な状態におかれ、道徳的に統一された生活を送れないばかりか、個人や集団の自決の能力に応じ、それぞれの支配下にある社会的・政治的世界を享受できない」(Linklater, 1990, p. 25) という。しかし筆者はさらに悲観的である。ローカルな共同体は、人間である限りあらゆる人格に当然与えられるべき権利を保護しないどころか、それを侵害することがある。ある人たちを不当な理由であるいは理由なしに、差別し、排除し、攻撃し、侵略し、殺害することがある。その国内の人たちであっても、たとえば、迷信や偏見から、あるいは不当な理由から、一定の人々を差別し、攻撃する。しかしながら、その迷信や偏見や不当な理由は、その共同体内部の人間には迷信にも偏見にも不当にも思われていないことがある。また、ローカルな共同体は、その外部の人々に対しては、なおさら重大な害を及ぼすことがある。カントは戦争を批判するが、国内においては武力紛争にまで至らない問題でも、他の国家や共同体に対しては容易に武力が行使されるからである。それは、国家がその共同体の内と外という区別をして、人間をそこに帰属する仲間とそうでない人々に区別をし、外部の人間を道徳的な配慮の対象から外しやすいからである。

このいずれの場合においても、ローカルな共同体の閉鎖性が道徳的・倫理的な問題となっている。あるローカルな共同体の慣習や信念、社会秩序、さらに価値体系は、他のローカルな共同体から見たときには、恣意的で無根拠なものに思われることがある。たとえば、ある犠牲の儀式があったとして、その儀式はその社会においては、豊作による社会の豊かさを実現するものとして考えられていても、他の社会から見れば、まるで効果のない、恣意的で目的合理性を欠いた儀式に思われるということがありうる。その場合には、犠牲となる人は無意味な死を与えられることになり、その儀式は不正な社会慣習と考えられる。これは極端な例であるが、ある共同体における伝統的な慣習や信念、社会秩序、価値体系の相当の部分は、他の社会から見たときに、多かれ少なかれ恣意的で合理性がないことがある。

もちろん、それらの慣習や信念、社会秩序、価値体系が無害である場合や、ある種の喜びを構成員に与えている場合もある。たとえば、クリスマスで友人や家族同士でプレゼントを交換するとか、盆に家族親戚が集まって墓参りをするなどといった場合である。しかし他方で、一部の構成員に多大な損害や不利益を与えているような伝統的な慣習や信念なども存在する。たとえば、「女性は勉強しなくて良い」などといった女性ジェンダーに関する

古典的な価値観や、ある宗教は邪教であるといった信念がそうである。ローカルな共同体は、その古典的な慣習・信念・社会秩序・価値体系によって個人の人權に侵害を行っていることがある。多様な人々が参加しているより包括的で大きな共同体は、小さな共同体よりも不正を行う傾向は低い。というのも、より包括的な共同体では、多様な人間価値と秩序に関する同意が必要とされ、社会における慣習や信念もその価値に合理的に結びついていなければならないからである。この包括性が地球上において最大化されたものがコスモポリタンな共同体である。そこでは、理論上、あらゆる個人が参加することが想定されており、あらゆる個人の人權が真剣に擁護されることが同時に想定されている。

したがって、より包括的な共同体は、そこにおける慣習・信念・社会秩序・価値体系がより相対化されており、より合理化されていて、より包括的で抽象化されていることであろう。たとえば、信仰に関して、ローカルな共同体では、特定の宗教を信仰することが義務化されていることがあるかもしれない。実際に、国教を定めている国家は多数存在する。これに対して、より包括的な共同体では、どの宗教を信仰することも可能であり、さらに、いかなる宗教も信仰しないことも宗教的態度として可能であることになる。こうして、共同体における慣習・信念・社会秩序・価値体系が最大限に包括的であり、その意味において個人の信念や価値、行動をもっとも規制することの少ない共同体が、コスモポリタンな共同体である。

コスモポリタニズムが批判するのは、ローカルな共同体の閉鎖性が個人の人權を抑圧する場合である。共同体では、何かの変化や新しい問題が生じ、組織における慣習・信念・社会秩序・価値体系を変化しなければ、それらに対応できない場合がある。閉じた共同体は、その場合においても、ある時点のその共同体の状態をあくまでも保守・維持しようとする傾向がある。たとえば、共同体のなかに新しい交易先ができて、それまで価値がないと思われてきた作物に大きな交換価値が生じた場合、その共同体のなかに新しい仕事が生まれ、裕福な層の交代が生じるであろう。閉じた共同体はこの変化を恐れ、交易そのものを禁じる。閉じた共同体の道徳は、その慣習と一体化しており、そのルールやしきたりを遵守するように成員に求める。その秩序を乱すような出来事や変化、新しい異質な人々はできるかぎり排除される。

閉じた共同体は、一定の固定的なルールや制度、慣習、権威からの圧力である責務から成り立っており、そのルールや制度、慣習について疑問を持つことなく守るように求められる。これらのものは不動とみなされ、たとえ、それが変化したとしても、変化したことを忘れ、認めようとしない。安定した同一であり続けるものに執着し、不変の原則や規則性をありがたがる。ここでの人と人のつながりは、ひとりひとりの人間として直接に相和

合するのではなく、共同体の固定的な慣習・信念・秩序・価値によって媒介されている。したがって、共同体の固定的な秩序の変化（それは「乱れ」と呼ばれる）は、共同体そのものを解体する悪として認識される。個々人のニーズに応じて、共同体の秩序が調整されるべきだとはまったく想像もされない。ローカルな共同体の問題は、それがローカルであったり、小さかったりすることからくるのではない。共同体は、その規模を問わず、閉鎖している場合にのみ問題となるのである。

これに対して開かれた共同体は、その成員に境界を定めない。コスモポリタンな共同体は地上最大の共同体であるだけでなく、その成員を人類と定めている点において境界を設定していないのである。人類であるかぎり誰であれ、コスモポリタンな共同体に自分を道徳的な配慮の対象とすることを求めることができる。開いた共同体は、何かの変化や新しい問題が生じたときには、自分のあり方、共同体の慣習・信念・秩序・価値を改変して、それに応じる。開いた共同体は、新しいメンバーを迎い入れるためにおのれを組織し直す。

3. コスモポリタニズムへの挑戦

コスモポリタニズムへの反対は、いわゆる「都会」的な価値に対する「田舎」の人々の反応と同型である。コスモポリタニズムに対する批判はさまざまな観点からなされる。いくつかの批判は、その実現可能性に対して悲観的であったり、世界政府の抑圧性を指摘したりするものであるが、より根本的な批判としては、コスモポリタンな人間になることに對する以下のような抵抗や拒否が存在する。いわく、コスモポリタンは根無し草である、地域共同体に貢献するという気持ちがない、すぐに移動し、地域にしっかりと根付く気持ちがない、消費主義的であり、エリート主義的である。誰もがローカルな共同体の特徴を拭い去ることはできないはずなのに、コスモポリタンは、リベラリズムと同じく「負荷なき個人」を欺瞞的に想定しており、それは幻であるだけでなく、抑圧的である。また、コスモポリタニズムを地域性の破壊としてみなす批判もある。すなわち、コスモポリタニズムは、それぞれの場所の特性を無視して、画一的で無個性な普遍性を導き入れて、地域共同体の統一性と秩序を乱してしまうというのである。これらのコスモポリタンへの批判は、そのままそっくり都会の住人に対する批判であり、都会化への批判であるといえるだろう。

「都会」では、その住民の多くが移住者であり、新しい移住者も多い。多様な人々が行き交い、産業は主にオフィスワークやサービス業であり、その地域の自然をそれほど意識せずとも暮らせて仕事ができるという意味で、特定の場所性をもたない。他方、「田舎」は人口の流動性が低く、代々、その場所に住み、同じ職業を世襲する場合も少なくない。地

域における住民どうしのつながりは密接であり、ときに粘着的である。その地域の自然と結びついた生産、とくに第一次産業へ協働して取り組むことが共同体にとって重要な絆を形成している。都会型のエリートはいないが、社会階級や役割がしばしば固定的である。

「都会」は変化が早く、さまざまなものが行き交う空間（スペース）であるとするれば、「田舎」は、変化が遅く、比較的安定して持続的な諸特性を有した場所（プレイス）である。コスモポリタニズムを批判する人たちは、自分たちの居住地が個性ある場所ではなく、一つの空間に過ぎなくなってしまうこと、定住の地ではなく、通過と滞在の地になってしまうことを恐れる。

私は以前の著作で、エドワード・ケイシーを参照しながら、人間の住み方を、「ヘスティア的住み方」と「ヘルメスの住み方」に分けて、その特徴を論じたことがある（河野, 2014, 第6章）。ヘスティアとは、ギリシャ神話におけるかまどの女神であり、家族的生活の中心である炉端を象徴する。これに対して、一方、ヘルメスは韋駄天で知られるギリシャの神であり、神々のメッセンジャーである。それゆえ、ヘルメスは、移動と運動、交通、交信を司り、交換と商業の神である。彼は国境の守り手であり、国境を渡る旅行者、遊牧する羊飼いと牛飼いの庇護者である。また、盗賊と嘘つきの悪知恵の庇護者でもある。

ヘスティアの住み方とは、同じ場所に佇み、宿り、滞留することであり、そこに定着することであり、人々ともに居つづけることである。この居住形態の中心には家と所有地があり、人々の行動はこの中心へと回帰していくような求心的傾向をもつ。他方、ヘルメス的な住み方とは、一箇所に留まらず、外に出て、何かと何かの間を往来し、移住し、放浪する。ヘルメスにとっては炉端や家のような中心は存在せず、あらゆる場所が周辺的である。

時間性と空間性も、ヘスティアとヘルメスでは異なってくる。居住場所が固定しているがゆえに、ヘスティア的住み方では経験と知識は時間と歴史に結びつき、時間と歴史が精神と同一視される。他方、ヘルメス的な住み方では、経験や知識はつねに場所に相対的であり、他の場所でも同じ経験や知識が役に立つかは分からない。同じ場所でも得られるアイデンティティや、その場所の歴史や文化はヘルメスには重んじられない。

ヘルメスの守護する人びとの多様さ、ヘルメスが果たす役割の広さは、彼が変身する神であることと無関係ではない。ヘルメスは、さまざまな場所へと適応して変身する。他方、ヘスティアは同じ場所で同じ役割を果たす。ヘスティアは、場所と結びついた強固なアイデンティティ、内向的な一貫性、それゆえの役割の狭さを象徴する。ヘスティアは安定と同一性の神であり、ヘルメスは変化と変身の神である。ヘルメスにとって精神とは移動できるもののことである。不動の変化しないものは、むしろ生命や精神を持たない死せる物

質の特徴である。明らかに「都会」はヘルメス的であり、「田舎」はヘスティア的である。ヘルメスはコスモポリタニストであり、ヘスティアはローカルな共同体への愛着を表している。

ローカルな共同体が根付いている場所とは、単なる自然環境ではなく、特定の自然環境を人間が歴史的に改変することで成立した、いわば和辻哲郎が論じたような「風土」である。コスモポリタニズムは、そうした風土性と対立するものなのであろうか。コミュニタリアンの発想に立つ人たちは、特定の風土に生まれ、育つこと、そうしたコミュニティにある意味で束縛されながら、貢献もすることを意味ある人生にとって不可欠であると考ええる。こうした立場は、ハイデガーの実存主義やウォルツァーの政治哲学に見出され、彼らの考えはコスモポリタニズムに対立する。ハイデガーにとって、場所性と結びついたコミュニティを失うことはアイデンティティを失うことである。ハイデガーにとって人間とは植物であり、花を咲かせ、実を結ぶためには、地中に根を持っていなければならないのである (ハイデガー, 2008)。

特定の場所に定住し、その地域共同体への貢献こそが個人の人生にとって大切なのだという考え方は、政治哲学におけるコミュニタリアニズムにも見出せる。コミュニタリアニズムは、リベラリズムやリバラリアニズムのみならず、コスモポリタニ的な普遍主義にも対立する。また、ウォルツァーによれば、道徳性は、場所において共有された生活様式を特定の形で理解することに根ざしており、こうした共同体の背景や文脈を理解しない普遍主義はむしろ不正に加担することだという (ウォルツァー, 1999)。マイケル・サンデル (サンデル, 1999) も、現代社会で個人は、共同体への帰属感を喪失していると批判する。彼によれば、個人は、共同体への参加によって自己統治を高め、同胞への共感と責任を持つべきである。ただしサンデルは、国家はアイデンティティを与える共同体としては規模が大きすぎると考えており、より小さな地域共同体への帰属意識と参加を高めるべきだという。

だが、いずれの場合にせよ、上にあげた哲学者たちは、ローカルな共同体に足場を有していることがアイデンティティや道徳性などの個人の人生にとって重大な意義を持つと考えている。たしかに、私たちは、特定の環境に生まれ落ちて、ある (あるいはいくつかの) 共同体の中で育ち、そこから強い影響を受けることは、まぎれもない事実である。アメリカで生まれて子ども時代をそこで過ごした人は、どの言語を習っても米語のアクセントが混じり、食べ物や飲み物の趣味はやはりそこで環境から影響を受けているであろう。しかしながら、この事実としての自分の特殊性に対して、私たちはさまざまな態度をとることができる。この自分の特殊性をとくに重要性を持たない特性に過ぎないとみなすことも

可能であるし、それを乗り越えるように努力することも可能である。他方で、この特性こそが、私のアイデンティティをなすものだとして固執することもできるだろう。この固執はある場合には、非合理的な態度となる。非合理性とは、理性の欠如ではなく、理性による相対化と客観化を拒絶する態度のことである。それは、ある特定のものへの愛着をあらゆるものを判断する基準としようとする、いわば、移動や視点の変換の拒否であり、他なるものへの共感の拒否であり、ヘスティア的な執着心のことである。しかし、自分に備わった事実的な特殊性に対してどのような態度をとるかは、本人の決定に依存している。ローカルな共同体に自分の人生の足場を認めるのも、その人の判断と選択の結果である。

他方、「都会人」は、特定の地域共同体への帰属が自分にとって重大な意味を持つという主張を根本的に理解できない。ハイデガーの植物の比喩は理解しがたく（人間は動物なのだから）、彼らが言うようなローカルな共同体だけではなく、職業や宗教や家族のような移動可能なものが自分のアイデンティティになりうるからである。これまで、「都会人」は何度も居住地を変えてきたし、子どもの頃に住んだ地域が最善の場所だったわけではない。いや、そもそも、それほど固定的なアイデンティティは人間にとって大切だろうかとの疑問が生まれてくる。コミュニタリアンは、生まれながらのアイデンティティを特別視して、境界で囲われた地域への帰属を重視するが、多くの人は、自らのアイデンティティを形成するのは自分自身による人生の航路や選択であると考えている。どの集団に対して、どのような帰属意識を持ち、どのような貢献をするかも自分で判断し選択し、それに責任を持ったからこそ、そこに自分のアイデンティティが生じるのである。よって、自分が同一かどうかなどよりも、人生の節目においてよき選択を行っているかどうかの方が、自分の人生にとって重大だと指摘することだろう。センは、コミュニタリアン的なアイデンティティよりも、理性的な選択こそが人間の自立には不可欠であり、そうした自立した人間が作り出す社会の方が発展するものだと論じているが、コスモポリタンなら大きく頷くことだろう（セン, 2003）。コミュニタリアンの言うアイデンティティなるものは、あまりに固定的であり、同一性や本質性を求めすぎている。人間の自己とは固定的な本質にあるのではなく、私とはむしろひとつの流れであり、過程であり、運動である。そこで重要なのは自分がいかにして変わらないかではなく、どのような目的や価値を立て、それらに向かってどのように自分を進めたかである。個人を重視する立場はこのように考えるだろうし、コスモポリタンもそこに含まれるであろう。

また、道徳的な配慮とは、個々人についてなされるべきものであり、コミュニティを対象としたものではない。ローカルなコミュニティが維持するに値するかどうかは、そこに所属する個人にいかにかかっているかどうかにかかっている。もちろん、環境倫理的な意味

において、自然に対して道徳的な配慮をすることは大切である。産業化が地域の自然に重大な負荷をかけることはしばしば耳にする問題である。しかし、このことはコスモポリタニズムの是非とは無関係である。ローカルな共同体の昔ながらの生活様式は環境負荷が少ないということと、その生活様式が個人の人權をないがしろにするような側面を持つという二つのことは独立のことである。個人の存在をないがしろにしない、かつ、環境負荷の少ない生活様式はいくらでも構想可能である。コスモポリタンはこう考えることだろう。

ここから分かることは、個人に焦点を当てたときには、ローカルな共同体に重きを置く主張はあまり強いものに思われなくなることだ。であるがゆえに、多くの人が「田舎」をあとにして、「都会」へと移動するのである。ローカルな共同体に重きを置く立場がコスモポリタニズムに対して主張したいことは、自分の帰属するローカルな共同体ないしは風土を変化させずに維持し続けたいということであり、つまり共同体そのものの持続である。彼らが最終的に問題としているのは、個人においてローカルな共同体への帰属がどれほど意味を持つかという問題ではないのである。

4. 形而上学的対立

これまで見てきたローカルな共同体に重きを置く閉じた共同体主義とコスモポリタニズムの差異は、最終的に、形而上学的な差異として以下のように図式化することができる。

閉じた共同体主義	コスモポリタニズム
ヘスティア的な定住	ヘルメス的な移動
求心的	遠心的
単一を中心	中心の不在
絶対化	相対化
同一性	変身
「田舎」	「都会」
境界設定的	無境界的
集団中心	個人中心
非合理性	合理性
固定と停止	運動と移動
存在	生成

この図は、形而上学的・存在論的な特性の対比となっている。共同体主義とコスモポリタニズムの対立は、政治的な選択の対立であると同時に、世界がどのような存在であるかという形而上学の対立である。政治は形而上学を伴っている。

さて、ローカルな閉じた共同体主義とコスモポリタニズムの対比は、二分法的に、調停不能な対立なのであろうか。この二つの形而上学的特性を調停するために、幾つかの考えがすでに提案されている。

ひとつは、人間は下位の小集団への愛着から始まり、それが徐々に大きな集団への愛へと同心円的に拡大していくという考えである。コスモポリタニズムを批判するマコンネルも、その逆にコスモポリタニズムを唱導するヌスバウムも、家族や隣人、地域社会への愛が拡大され、国家を愛し、人類を愛するようになるのであって、ローカルな共同体への愛は人類愛の最初のステップだというのである (マコンネル, 2000; ヌスバウム, 2000)。コスモポリタニズムは、地域から始まるというわけである。かつてのエドモンド・バーク (2000) や、「根を持ったコスモポリタニズム」を説くアッピア (Appiah, 2005) のような現代のコスモポリタンも同じ趣旨の主張をしている。

これを同心円主義と呼ぶならば、これはあまりに現実から遊離した抽象的な楽観論だと言わざるを得ない。人間同士の憎しみは、もっとも近い関係性の中でも生じる。実際に近接する国家や地域の関係が、遠くの地域よりも良好だなどということがあるだろうか。世界のどの現実を見れば、そのような判断ができるのか。そして、下位集団への愛は、しばしばより大きな集団や他の集団への敵愾心やルサンチマンへと成長する。

境界を確定して、その中の人間だけを道徳的配慮の対象とするような共同体主義は、必ずや誰かを排除している。そこには、排除されるべき境界の外の人間がすでに想定されている。つまり、ローカルな閉じた共同体は、その外部の共同体が存在するからこそ存立するのであり、その外部への対抗として閉じた共同体が存立しているのである。逆に、人口流入を制限しない都市が境界をもっているだろうか。都市はダラダラと周囲に向かって拡張し続けている。小さな地域集団にせよ、現代の国家にせよ、若干名の個人を包含し、それ以外の個人を排除する点では閉じた共同体である。閉じた共同体には、外部に存在する変化の要因を排除して同一性を保とうとする仕掛けが最初から仕込まれている。ローカルな共同体は、たとえどんなに大きくても、それが境界を持つ閉じたものである限り、その共同体とコスモポリタニズムの対象である人類との間には、有限から無限への、閉じたものから開いたものへの乗り越えがたい距離が存在しているのである。

ある地域なり国家への愛とは何であろうか。愛とは対象が同一であることを望むものではなく、対象を受容しつつも、対象の発展と成長を願うものである。ある共同体の静止し

た姿を「愛している」という時点で、そこには、他なるものへの排除によって同一性を保とうとする利己主義が伴うはずである。ローカルな共同体へのコミットメントが、コスモポリタニズムと両立することがあるとすれば、それはそのコミットメントが対象の発展と成長を願う愛であり、開かれた態度をとる限りにおいてである。結局、人間の集団の間に何らかの形で境界を引こうとすることは、かならず排除という非倫理的な働きが伴うのである。

したがって、閉じた共同体の延長上に、コスモポリタニズムはない。おそらく、ローカルな閉じた共同体とコスモポリタニズムを調整しようとする立場、ヌスバウムやマコンネルは、自覚しているかどうかはともかく、ローカルな地域の自律性、言い換えるなら、民族自決権の現代版を尊重しているのであろう。同心円のすべての円に敬意が払われなければならないというわけだ。つまり、彼女らは、コスモポリタニズムは、「新自由主義的グローバリゼーション」と呼ばれている強欲な資本主義者たちによるグローバル経済化や、植民地主義を彷彿とさせる国際介入主義に足場を与えてはならないと考えているのである。筆者はこれに一定の理解を示すが、先ほどから述べているように、同心円的に人間の道徳的配慮が拡張するなどという考えは夢物語にしか思われず、どのような「円」に対しても等しく敬意が払われなければならないなどとは思われない。ヌスバウムやマコンネルは、ローカルなガバナンスに対して信頼を置き過ぎているように思われる。ローカルな共同体における差別と不正の被害者は、外部からの与えられる支援と普遍的な平等を求めている。問題は、この外部がどこにあるのか、ローカルな共同体から妨害されずに、どのような手段で支援の手をだせるのか、なのである。

文献

- Appiah, K. A. (2005). *The ethics of identity*. Princeton: Princeton University Press.
- バーク, エドモンド. (2000). 『フランス革命についての省察』, 上・下, 中野好之訳, 岩波文庫.
- ディオゲネス, ラエルティオス. (1984-1994). 『ギリシャ哲学者列伝』, 上・中・下, 加来彰俊訳, 岩波文庫.
- ハイデガー, マルチン. (2008). 『ハイデガーの建築論: 建てる、住まう、考える』, 中村貴志 訳・編, 中央公論美術出版.
- カント, イマヌエル. (1985). 『永遠平和のために』, 宇都宮芳明訳, 岩波文庫.
- 河野哲也. (2014). 『境界の現象学: 始原の海から流体の存在論へ』, 筑摩選書.
- Linklater, A. (1990). *Men and citizenship in the theory of international relations*. 2nd ed. London: Macmillan.
- マコンネル, マイケル・W. (2000). 「小集団を無視するな」, ヌスバウムほか (2000) 所収.
- ヌスバウム, マーサ. (2000). 「愛国主義とコスモポリタニズム」, ヌスバウムほか (2000) 所収.
- ヌスバウム, マーサ. ほか (2000). 『国を愛するということ: 愛国主義 (パトリオティズム) の限界をめぐる論争』, 辰巳伸知・能川元一訳, 人文書院.
- ボッグ, トマス. (2010). 『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか: 世界的貧困と人権』, 池田浩章他訳, 生活書院.
- サンデル, マイケル. (1999). 「公共哲学を求めて: 満たされざる民主主義」, 中野剛充訳, 『思想』, 904 号,

34-72 頁.

セン, アマルティア. (2003). 『アイデンティティに先行する理性』, 細見和志訳, 関西学院大学出版会.
ウォルツァー, マイケル. (1999). 『正義の領分: 多元性と平等の擁護』, 山口晃訳, 而立出版.
山川偉也 (2008). 『哲学者ディオゲネス: 世界市民の原像』, 講談社.

〔立教大学文学部教育学科・教授〕